様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１１日現在

期間番号：11501
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520522
研究課題名（和文） 中国語母語話者のための漢字音教材開発－入声音を含む漢語を中心に－
研究課題名（英文） Development of Teaching Materials on the *on* reading of Kanji for L1-Chinese-speaking Learners of Japanese: with a focus on Sino-Japanese words that include *nissho* or entering tone

研究代表者
黒沢　晶子（KUROSAWA AKIKO）
山形大学・基盤教育院・教授
研究者番号：50375333

研究成果の概要（和文）：
中国語を母語とする日本語学習者にシステマティックに見られる問題－北京語では失われた入声音を含む漢語の音読への母語の干渉－を取り上げ、方言字音使用・識別調査、学習者調査を行うとともに基礎的な教材を作成した。入声を残す方言中、呉語話者は入声音と非入声音(例：呉語「派」/pʰa/と「拍」/pʰaʔ/)が識別でき、広東語話者は入声音相互の区別（例：八 /paː t̚/ と百 /paː k̚/）もできる。一方、台湾閩南語では３つの入声音/p̚, t̚, k̚/は相互に区別されない傾向にある（例：執 /tsip̚/ と 職 /tsit̚/）が、声門閉鎖音で終わるとされる字音の閉鎖がごく弱まって母音に近くなり,他の入声音と対立を見せている(例:踏/taʔ/が達/tat̚/と)。学習者の習熟度が高まるにつれ入声音の問題は目立たなくなるが、なじみのない語の音は正確に類推できない。教材では日本語字音を中国語各方言の字音と対照させるとともに、音変化の規則性（例：実験と実現）が帰納的に学習できるよう工夫した。

研究成果の概要（英文）：
This study takes up negative transfer from Chinese which native Chinese-speaking learners of Japanese systematically show: *on* reading of Sino-Japanese words that include *nissho-on*, originally a syllable ending in one of the three stop consonants, /p̚, t̚, k̚/, in Middle Chinese and lost in Modern Mandarin dialects. In tandem with studies on southeastern Chinese dialects that preserve *nissho-on*, and learners' use of strategies in learning it, a class material has been developed. L1-Wu Chinese speakers identify a glottal stop-terminating *nissho-on* (e.g. 拍/pʰaʔ/ versus 派/pʰa/), and L1-Cantonese speakers discriminate between contrastive stop-ending syllables (e.g. 八 /paːt̚/ from 百 /paːk̚/). On the other hand, in the Min Chinese spoken in Taiwan three stop-final syllables, /p̚, t̚, k̚/, tend not to be discriminated from each other (e.g. 執 /tsip̚/ not from 職 /tsit̚) whereas a syllable-final glottal stop is considerably weakened so that it is recognized as distinctive from other stop-final syllables (e.g. 踏/taʔ/ from 達/tat̚). Although the *nissho-on* problem becomes less prominent as learners acquire proficiency in Japanese, it is still hard for them to identify the correct reading of unfamiliar words. The class material includes a table comparing Japanese *on* readings with those of Chinese dialects, and is also intended to encourage learners to find out regularities in phonetic changes in Japanese (e.g. as in jikken 実験 and jitsugen 実現).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	300,000	90,000	390,000

2010 年度	100,000	30,000	130,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学　日本語教育

キーワード：漢字音、入声音、標準語、呉語、台湾閩南語、広東語、教材、母語の干渉

１．研究開始当初の背景

日本語を学んでいる中国語母語話者にとって、漢字の存在は、学習を容易にする半面、外国語としての注意が薄れやすく、発音や字形、意味用法に母語の干渉を受けがちであることが指摘されている。筆者の指導する大学・大学院留学生も、例えば、「国民」をコウミン、「実現」をジゲンと読み、「発」を「发」、「際」を「际」と表記し、「経済が高速に発展し」のように中国語の用法のまま漢語を用いるといったことがしばしば観察される。日中両言語で漢字を共有するメリットは、読解の速さなど、理解において著しいが、一方、口頭表現、文字表記、作文といった産出活動では、日本語として不適切な使用が少なくない。また、日中の漢字音・表記・漢字語彙に違いがあるということを学習者自身が十分に意識化していないことが多く、それこそが最大の問題だと言えよう。

このうち、漢字の発音・読みに関しては、これまでの研究で全般的な相違点や認知上の問題点が指摘され、教材も作られている。しかし、「国」をコウ、「実」をジと読む類の問題は、官話系方言を母語とする学習者に、上級学習者であってもシステマティックに見られる誤用であるにも関わらず、試験にも作文にも表れにくいためか、これまで鈴木（1985）などを除き、ほとんど注目されたことがない。ク、ツを落とす原因としては、北京語で「国」を guo2、「実」を shi2（数字は声調）と発音することから、日本語を音声化する際、母語の干渉を受けている可能性が挙げられる。

この「国」「実」は、漢字の四声の一つ、入声に属する。入声とは、中国中古音で音節が/p̚, t̚, k̚/で終わり、短く詰まった音調を持つもので、日本語では、日本語の音韻体系に合わせて最後に母音を加え、フ（現代仮名遣いでウ）・チ・ツ、キ・クで終わる音として定着した。（/p̚, t̚, k̚/の右肩の記号は、閉鎖のあと破裂しない内破音であることを示す。）現代中国語では、北京語を初めとする官話系方言で音節末の/p̚, t̚, k̚/は失われており、これが日本語においても「ジゲン(実現)」のように母音終わりで音声化する問題の背景にあると考えられる。

チ・ツ、キ・クで終わる漢字は、「一致」「実際」「発表」「適格」「国境」のように、後続子音が無声阻害音 k、s、t、h(p)で始まるとき、原則として母音が脱落する。（門脇・黒沢 1983）このように、後続音によっては、いわゆる促音化が起きることも、学習を複雑にしている一因だと考えられる。

複合語・派生語では、構造上の切れ目を反映して「特別・室」（○●・○型）のように、母音が脱落せず、無声化にとどまる。一方、後続の語との塾合度がより高いことを反映して、●・○○型は脱落するものと無声化のみのものとが相半ばする（別世界、別行動）。（黒沢 1995）

「合唱」「合成」「雑誌」「雑炊」のように、同じ環境下でも母音脱落現象が限られた範囲でしか起こらない入声（にっしょう）-p 音（旧仮名遣いでフで終わるもの）の音変化は、歴史的に和語のウ音便、促音便に見られる音変化と同じタイプのものであった。現代語ではウ音で終わる字（例：急、業、習、集）が常用漢字の約 7 割を占め、促音化はツやッで終わる慣用音を持つようになった一部の字（例：十、合、雑）に限られる。（黒沢 1996）

入声に由来する字は 2010 年改定の常用漢字 2,136 字中 399 字（k 音 235 字、t 音 114 字、p 音 50 字）と 20%弱だが、入声音を含む語彙の比率は、それよりも高い。日本語能力試験出題基準にとりあげられた 1～4 級語彙のうち、カ行で始まる漢語を見てみると、1,132 語中の 385 語、すなわち 3 分の 1 余りが入声音を含んでいることがわかる。この比率からも、入声音を含む漢語が正確に読めることは、コミュニケーション上も大切なことだと言えよう。

２．研究の目的

本研究は、１で述べた、日本語を学ぶ中国語母語話者が日本語の漢字を学習する際の典型的な問題点を、特に官話系方言で歴史的

変化によって区別のつかなくなっている字音の読みに焦点を絞って明らかにし、その結果にもとづいて教材を開発することを目的としている。

入声音は官話系方言では失われているが、中国南東部の複数の方言（呉語、広東語、閩南語等）には残っている。では、これらの方言を母語とする日本語学習者なら、その知識を日本語字音の学習に活用することはできないだろうか。この疑問が本研究のひとつの動機でもあり、その点を明らかにし、教材開発に役立てることを意図している。

３．研究の方法

(1) 方言話者の方言使用および字音識別調査

対象：入声音を残す方言の話者（大学生・大学院生・社会人、年齢中央値 22 歳）

呉語 5（上海 3、杭州 1、衢州 1）・台湾閩南語 7（北部 5、南部 2）・広東語 5（香港 1、広東省 4）　計 17 名

方法：

① 方言使用に関するインタビュー

② 各方言ごとに入声字・非入声字を組み合わせたミニマル・ペア(計 8～24 組)を見て発音し、同じ音か否かを判断する。

目的：

a 入声音を残す方言の話者がどの程度､方言を維持しているかを知る。

b 方言話者が入声音を非入声音から識別しているか、入声音相互を異なる音として認識しているかを確かめる。

(2) 台湾閩南語の入声音における声門閉鎖音の分布

方法：台湾教育部國語推行委員會編(2008)『臺灣閩南語常用詞辭典』オンライン版 http://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/index.html を資料として、声門閉鎖音の分布を文読・白読、および中古音における韻尾/p̄, t̄, k̄/との関係から見る。日本語学習に活かす目的から、常用漢字 2,136 字中の入声字 399 字を対象とする。

目的：入声音消滅の過程にあるとされる声門閉鎖音がどのような分布を持つかを知り、日本語学習者から見て、中古音（日本語のフ、チ・ツ、キ・クに対応）との関係が予測できるかどうかを確かめる。

(3) 学習者調査

対象：中上級日本語学習者（日本語能力試験 1 級、2 級、N1、N2 相当）の大学生・大学院生　延べ 65 名(母語：中国官話系方言、呉語、台湾閩南語、広東語、韓国語、モンゴル語、タイ語、インドネシア語、マレー語、英語、オランダ語、ラトビア語、ロシア語、ポーランド語、エストニア語)

方法：

① 日本語の入声音を含む漢語 30 語の読みを 4 つの選択肢から選択する

② 「発」を含む漢語 15 語の読みを書く

③ 日本語の入声音を含む漢語 120 語の読み上げ

④ 日本語の漢字音習得に関するインタビュー

目的：下記の a～d を明らかにする。

a 音読みの漢字のうち、チ・ツ、キ・クで終わる入声音を含む漢語の読みが構造上のどの位置に現れるとき、また、後続音が何であるとき、誤用が起こりやすいのか。

b 学習者の母語と誤用との相関関係

c 語彙としてのなじみの度合いが読みの正確さにどう反映されるか（あるいはされないか）

d 学習者は日本語の字音をどのように意識しているのか（あるいはしていないのか）

(4) 教材で採り上げる漢字、漢字語選択のための基礎データおよび基礎教材作成

① 常用漢字(2010 改定版)中の入声字と各方言字音一覧作成

② 漢字使用頻度・単語使用頻度・単語親密度調査(天野・近藤 1999・2000/2003)およびそれらを基礎とする学習指標値(徳弘 2010)に基づく漢字、漢字語の選択

③ 入声字を含む音読語の生産性の高いものからサンプル教材を作成

４．研究成果

(1) 方言(母語)話者を対象とする字音使用・識別調査の結果

① 方言使用は広東語＞呉語＞閩南語

学校教育で広く使われている、北京語音・官話方言にもとづく言語は、大陸で「普通話」、台湾で「國語」と呼ばれている。両者は発音・表記・語彙にやや違いがあるが、相互理解が可能である。本研究では、いずれも方言に対するものとして「標準語」と呼ぶことにする。

方言使用に関するインタビューからわかったのは次のことである。

学校教育（授業）は、広東語を使う香港と 90 年代上海語も使っていた上海市以外では、ほぼ標準語で行われている。従って、方言は主として音声言語であるが、文字化されたものとして、歌詞やチャット、ブログ等があり、標準語と方言が混淆した文を方言音で読むことが広く行われている。

方言使用には地域差があり、母語であり第一言語と言える香港の広東語から、母語というより、むしろ継承語と呼ぶのがふさわしい台湾北部の閩南語まで、一様ではない。香港で標準語をあまり使わず、自信を持って話せないほどなのに対し、台湾北部では祖父母以

外の家族とは標準語で話している。これは多言語社会の台湾で 1949 年以降進められた国語（標準語）普及運動の結果と言える。

台湾北部に住む 26 歳のインフォーマントは世代によってどのように言語使用が異なるかを次のように語っている。閩南語しか話さない祖父は孫の自分の名前を呼ぶにも閩南語の発音で呼ぶ。標準語で書かれた新聞を読み、その内容について話すときは、閩南語を使う。その際、政治家の名前などの固有名詞も閩南語の発音で言う。両親が小学校に通っていたころ（1960 年代）には学校で閩南語を話すと体罰や罰金があった。だが、自分が小学校に入ったときには、皆普通に標準語で話すことができ、罰則もなかった。現在は、郷土の文化を大切にという政府の方針で、8 歳の姪は小学校で方言を習っている。

外来人口の制限された上海市の小中学校では、90 年代、教員が上海出身者の場合は教科書の音読等を除き、上海語でも授業を行っていた。また、学校教育は標準語で受けた広東省（深圳市、韶関市生まれ・育ち）のインフォーマントも広東語でのカジュアルな読み書きを頻繁に行っている。チャットや携帯電話の SMS、ソーシャルネットワーク、ブログなどで、標準語に広東語を一部混ぜて書くことが最も多い。標準語で書かれたものを方言音で読む方式はカラオケの歌詞にも用いられる。このように読み書きにも方言を使うインフォーマントは、日常的に方言音と文字を結びつけており、単語でなく単漢字からでも即座に音声にアクセスできる。

一方、音声言語としては比較的、方言を維持している呉語話者（上海市以外）は、普段それを文字化しないため、漢字を見て瞬時に呉語の発音が想起できるほど、文字と音との結びつきは強くない。その漢字を含む熟語を思い浮かべて、単語から単漢字の音を導き出している。また、台湾出身者が漢字を方言字音で読めるかどうかは、出身地域より個人差が大きかった。

② 方言字音の識別は広東語が一番

表 1 に、呉語・閩南語・広東語のインフォーマントが各方言字音で非入声音と入声音、入声音相互を識別するかどうか調査した結果を示す。

表 1：方言話者の方言字音識別

方言	非入声音との識別と例		入声音相互の識別と例	
呉語 上海 杭州 衢州	○	派/pa/53 拍/paʔ/55 爸/pa/53 八/paʔ/55	×	八/paʔ/ 55 百/paʔ/ 55 すべて 声門閉鎖音 [ʔ]で終わる
台湾 閩南語 北部	△	脚 /k^{h}a/7 卡 /k^{h}aʔ/4	×	執/tsip/4 職/tsit/ 4
			○	踏/taʔ/8, 達/tat/ 8
広東語 深圳 韶関 香港	○	過/kwɔ/3 国/kwɔk/3 裕/jy:/6 月/jy:t/6	○	八/pa:t/1 百/pa:k/1 踏/ta:p/6 達/ta:t/6

呉語（上海・杭州・衢州）では入声音の韻尾がすべて声門閉鎖音になって韻尾の内破音/p̚, t̚, k̚/相互の区別を失っている。しかし、呉語母語話者は、単なる母音終わりの字音と声門閉鎖音で終わる字音は識別できた(例：呉語「拍」/phaʔ/と「派」/pha/)。上海出身のインフォーマントの 1 人は、その違いを「『拍』は口を開いて、途中でやめる感じだが、『派』はずっと口を開いている」と説明している。

台湾閩南語の調査には、いくつかの問題があった。まず、出身地域を問わず、漢字語を見て音声化できないことが多く、これは、方言を読み書きに使う範囲がごく限られているためだと思われる。

次に、台湾閩南語には多くの漢字に文読（読書音）と白読（俗音）がある。入声韻尾については、文読が中古音を反映しているのに対し、白読に声門閉鎖音が多い。また、白読で/p̚, t̚, k̚/を持つものの、文読とは調音点の異なるものが見られる（例：力/lik̚/ →/lat̚/）。特徴的なのは、声門閉鎖音で終わるとされる字音は、実際には閉鎖がごく弱まり、母音終わりのように聞こえるものが少なくないことである。しかも、音響分析ソフトで母音部分の長さを測ると、同じ入声の /t̚/ で終わる字音の 3 倍にもなる例があり、元来の入声音とは単に韻尾が異なるだけでなく、質的に全く異なる音に変化しつつある可能性を示している。インフォーマントが「失/sit̚/4」と「湿/sip̚/4」、「職 /tsi t̚/4」と「執 /tsi p̚/4」はそれぞれ同じ音と認識しているのに対し、「踏/taʔ/8」と「達/tat̚/8」を異なる音と判断したのは、これを反映しているものと思われる。

広東語にも「北/pɐk̚/→/pɐt̚/」のように入声韻尾 /k̚/が/t̚/ に変化したものがあり、これは、調音点が軟口蓋から歯茎に変わった点、「生/sɐŋ/→/sɐn/」の変化とも共通する現象だと指摘されている(Matthews & Yip 1994)。香港出身のインフォーマントは、こうした発音が省力化によるもので、「懶音/la:j jɐm/」（ものぐさ発音）と呼ばれ、正しく直すべき音として否定的に捉えられていると話している。

だが、呉語、閩南語に比べると、広東語には相対的に韻尾 /p̚, t̚, k̚/ 相互の区別がよく残っていると言える。実際には韻尾は破裂しないため飲み込むような発音となり、両唇を合

わせる/p̚/は別として、英語話者や日本語話者の耳には /t̚/ と /k̚/ 違いがほとんど聞き取れない。それにも係わらず、広東語母語話者を対象に行った調査では、韻尾だけが異なるもの、例えば唇で調音するため区別しやすい「踏 /ta:p̚/6)」と歯茎音「達 /ta:t̚/6)」のみならず、歯茎音「八 /pa:t̚/1)」と軟口蓋音「百 /pa:k̚/1」もそれぞれ異なる音と認識していることがわかった。しかし、閩南語・広東語話者がどの程度入声音の識別ができるかについては、まだ調査の不十分な点があり、さらに対象者・調査語彙を広げる必要がある。

台湾閩南語の声門閉鎖音

台湾総督府編（1907）『日台大辞典』収録の「日台字音便覧」では、「末　ボァッ　ボァ」のようにカタカナで閩南語音が写されており、この場合、「ボァッ」が文読で韻尾/t̚/、「ボァ」が白読で /ʔ/に相当する。/p̚/は、小文字のプ、/k̚/は小文字のクで表現されている。声門閉鎖音が「末　ボァ」のように母音を表す小さいかな終わりで表記されていることは、短促な/p̚, t̚, k̚/ とは質の異なる音として聞き取られたことを示すのではないか。

台湾教育部の『臺灣閩南語常用詞辭典』オンライン版で声門閉鎖音で終わる音節と母音で終わる音節の音声を聞き比べてみると、声門閉鎖音を韻尾とする音節は、単独では母音より短いが、後続の音節がある場合、母音終わりの音節に近い長さに聞こえる。

音節末：母音		音節末：声門閉鎖音/ʔ/	
啼哭	thî-khàu	鐵甲	thih-kah
飽眠	pá-bîn	百萬	pah-bān
巴郎	pa-lang		

（ローマ字は教育部 2006 年公布の方案）

有坂（1936: 5-7）は、台湾閩南語の/p̚, t̚, k̚/は、ほとんど聞こえず、聴覚印象からは kib, kid, kig（b, d, g は無声）に近いとし、その次の段階で入声韻尾が声門閉鎖音になり、やがて消失していった過程に位置づけている。すでに声門閉鎖音になっているものは、現在、その次の段階に進みつつあると見ることができるのではないだろうか。

(2)　台湾閩南語の入声音における声門閉鎖音の分布

台湾閩南語の漢字音には、文読(読書音)と白読（俗音）がある。「日台字音便覧」のデータベースを作成している中澤（2010a）によれば、白読（俗音）に声門閉鎖音/ʔ/が多いという。

では、現代閩南語ではどうだろうか。台湾教育部の『臺灣閩南語常用詞辭典』を資料とし、日本語の常用漢字中の入声字 399 字を対象にした筆者の調査では、記載のある 374 字中 111 字（約 30%）が複数の読みの中に声門閉鎖音で終わる読音を持っている。

「文読」と明示された読みのある 135 字中に声門閉鎖音で読む字は 1 字もない。それに対して、/ʔ/の読みは、文読・白読の表示のない 243 字中 30 字、「白読」と明示された 135 字中 82 字（6 割強）を数える。このように白読は声門閉鎖音が多数を占めると言える。

次に、中古音との関係だが、現代語の声門閉鎖音とある特定の中古音の韻尾の独占的な強い結びつきを示すような偏りは、本調査の範囲では認められなかった。同辞典に記載のある字のうち、入声 k 音から声門閉鎖音になったものが 65/222 字、29.3%、入声 t 音からが 27/105 字で 25.7%、そして入声 p 音からが 18/47 字で 38.3%、全体で 110/374 字、29.4%だった（図 1）。日本語学習者から見て、閩南語で声門閉鎖音で終わると分類される字が日本語字音でフ、チ・ツ、キ・クのどれに当たるかは、自動的にはわからない。つまり、日本語字音の予測に直接的に役立てられるとは言えないだろう。

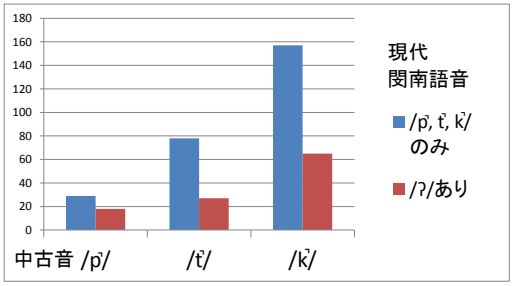

図 1：台湾閩南語入声における声門閉鎖音の分布

これに対し、現代閩南語で/p̚, t̚, k̚/の韻尾を持つものはどうか。一部中古音と異なる閉鎖音に変わってはいるが、全体としては『臺灣閩南語常用詞辭典』に記載のある入声の常用漢字 374 字中 330 字（88.2%）が中古音と共通する閉鎖音（ただし内破音）を文読・白読・文白に分類されていない複数の読みのうち、ひとつ以上の読みの韻尾に保持している。

今回の調査では、/p̚, t̚, k̚/は相互に識別されない傾向にあったが、いずれの韻尾も基本的に短促で、母音終わりの音節と大きく異なる特徴を持つ。従って、もし、学習者がある漢字を見てこの音を想起できれば、日本語で促音化を起こす可能性のある字だとわかり、その点で、呉語における声門閉鎖音で終わる音節とほぼ同じ役割を果たすことができる。ただし、白読の表示がある字に限れば、/p̚, t̚, k̚/いずれかの韻尾を持つ字は全体で 374 字中 43 字（11%）に過ぎないことに留意する必要があろう。

(3)　学習者調査の結果

2 級レベルの学習者対象の調査（30 語、選択式）では、2 字語で促音化、非促音化の区別がどの程度できるかを見たが、誤答は、母語を問わず、2 字目（2%）ではなく、1 字目に集中した（21%）。後続音による差は見られなかった。目立つまちがいに、「国交」をコクコウ（39%）、「発病」をハッビョウ（32%）とするものがある。「外国」「国際」のコク、「発見」「発表」のハッのように、このレベルの学習者は、それほど多くない手持ちの語の知識をもとに一般化を図っており、学習者独自の音読となっていると思われる。（調査①②、目的 a、b）

学習者は促音化の有無に関して規則性があることを習ってはいないが、1 級レベルとそれ以上の学習者を見ると、個別に覚えた語数が増えるに従って問題は目立たなくなる。だが、習熟度の高い学習者でも、なじみのない語の音が正確に類推できない。(例：実費)（学習者調査③、④、目的 c、d）

また、広東語、関南語話者に目立つのは、「述語　ジュッゴ」「学業　ガッギョー」「実利　ジッリ」「発熱　ハッネツ」のような読みである。（調査②③）日本語では、入声音由来のチ・ツ、キ・クは後続音によって変化するが、広東語、関南語では、音節末子音は、次の例のように後続音節の頭子音によって変わることがない。

	発展	発明
日本語	はってん	はつめい
広東語	/fa:t ʧi:n/	/fa:t meŋ/
関南語	/huat tian/	/huat biŋ/

このため、日本語字音でも後続音の種類に関わらず、同じ内破音的な音を適用してしまいやすいのではないか。そうであるならば、入声音を残す方言ゆえの問題もあるということになる。

以上の結果から、「促音化は後続音によって起きる」こととその規則性を意識化し、練習によって習熟するプロセスが促音化・非促音化を正確に行うことに一定の効果を持つのではないかと予想される。

なお、関南語の入声音と日本語の促音はその持続時間に有意差がある（陳 2011:16）。また、関南語における入声の存在は、関南語話者の日本語の促音・非促音の長さに正の転移を見せていない（西端 1996:310）。それは、広東語話者の場合も同様である（張 2011:4-5）。すなわち、発音そのものの習得には、母語のいかんに関わらず、長さに注意を払った練習が必要だと言えるであろう。

(4) 教材

2010 年改定の常用漢字中 50 字ある p 音字のうち、「急、給、協、業、習、集、答」のように、ツやッで終わる慣用音のないものが 35 字にのぼる。「合（例：合唱、合成）」のように、フ（ウ）とッ、ツが無声阻害音の前でどちらも成立し、ほぼ同等の熟語の生産性を持つものが 9 字あるが、これらは、日本語教育上は、規則としてではなく、単語ごとに覚えたほうが実用に即していると言える。さらに、「立」「圧」のように、無声阻害音の前では慣用音「ツ」しか使われないものが 6 字ある。「立」タイプの字は、フ（ウ）と読む熟語（例：建立、立礼）が一般的でないため、事実上、入声 t 音と同じ扱いをすることも可能である。（３(4)①）

また、(1)の方言字音識別調査の結果に鑑み、入声音を意識化し、かつ方言を維持している学習者がそれを活かせるよう、日本語、中国語標準語、方言の各字音を対照させた。

(3)の学習者調査の結果から、教材では、よりなじみのある語の音から帰納的に促音化の規則性を発見し、初見の語にも応用できるようなステップを採り入れた。語の選定には、頻度・親密度、旧日本語能力試験出題基準を併用した。

例：出席→出世、出生、出資；　出張→出典、出店；　出発→出版、出費

輸出→演出、選出　宿題→出題→出動、出土（３(4)②、③）

今後の課題として、方言字音識別調査で不明な点を明らかにすることと教材の改訂を行うことがある。特に方言字音の体系が複雑で、維持の度合いに地方差・個人差の大きい関南語の話者にとって方言音を想起しやすい語群（歌詞に現れたもの等）を選び、ヒントとして取り入れていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1　件）

① 黒沢晶子「中国語母語話者と入声音　－『循環型社会をジゲンし』とは？－」『日本語教育連絡会議論文集』23 号 pp.137 – 145　(2011) 査読なし

〔学会発表〕（計 2　件）

① 黒沢晶子「中国語母語話者のための漢字音教材開発－入声音を含む漢語を中心に－」第 24 回　日本語教育連絡会議　2011 年 8 月 19 日　ブルガリア　ソフィア大学

② 黒沢晶子「中国語母語話者の日本語漢字音習得の問題点」日本語教育連絡会議 2010 年 8 月 21 日　チェコ　ブルノ市

Hotel International

〔その他〕
① 黒沢晶子「漢字音の音変化－規則性を見つけようー」山形大学上級日本語教材 (2011)

６．研究組織
(1)研究代表者

黒沢　晶子（KUROSAWA　AKIKO）

山形大学・基盤教育院・教授

研究者番号：50375333